

砧聲斷續響村巷

一杵寒於一杵寒

白露爲霜天肅殺

木菜翻風秋正闌

誰家慈母獨擣月

丁東響急夜漫漫

回頭兒兮甘薄宦

短褐敝裘滯長安

君不見故園老親懷兒切

濤衣砧上淚未乾

砧を聞く（本宮三香）

木葉翻風秋正闌

断続して村巷に響く

砧聲

断續

村巷

響く

一杵は

一杵の寒き

よりも寒し

日露

霜と為り

天肅殺

木葉

風に翻えり

秋正間に闌なり

誰が

家の慈母か

独り月に擣つ

丁東

響き急にして夜漫々

秋正間に闌なり

頭を

回らせば児や薄宦に甘んじ

秋正間に闌なり

短褐

敝裘長安に滞まる

秋正間に闌なり

君見ずや

故園の老親児を懷うこと切なるを

秋正間に闌なり

通釈 砧を棲つ音が断続し、村の巷に響いている。杵の音は一つ一つ擣つごとに寒さを増してゆくようである。白い露も霜と変わり、秋の冷たい空気で草木が枯れ、樹木の葉は風に翻り秋も今が最中である。どの家の母であろうか、独りで月に向かつて砧を擣ち、トントンと杵の音が、秋の夜長に響いている。振り返つて見ると子供は薄給の官吏に満足してか、短い汚い衣服を着て、この寒さにみすぼらしい姿をして都で生活をしている。君はまだ知らなか、故郷の老いたる母親が、我が子を思う情に堪え、衣を擣つ砧の上に、ホロリと落とした涙が、まだ乾かないのを。

解説 中国では昔、夫が外征中、留守を守る妻は夫の衣を整えるため、砧を打つた。妻は淋しさに耐えながら、夫への思慕の情を込めて打つ所から、その音は哀切をもつた響きと受け取られ、砧の響きは古来、淋しいものの象徴として、詩文等の素材とされている。